



「ファーストレシーブ こどもたちの声に耳を」

滝田衛（七里ヶ丘こども若者支援研究所主宰

・NPO法人アンガージュマン・よこすか理事）

「僕は悪い子だから学校へ行ってはいけない」と発達障碍の小学生、
 「朝起きられない、気が付いたら夕方。後悔の毎日…」と不登校の中学生、
 「頭が悪いんで自立できない、母に依存している」と10年ひきこもる若者、
 「就職面接に不合格、つらいのは面接官のお説教」と約100社を受けた若者、
 僕は自分と向き合い自身を責めるこどもや若者（こども若者）と日々会話し、寄り添い、過ごしている。

いじめ被害19万8109人、小中学校不登校11万2689人（15年間10万人を超え続ける）、高校不登校5万7664人（別に中退者5万1781人）、児童虐待6万6701人、ひきこもり推計69万6000人（15～34歳 2010年）、これが2012（平成24）年度のこども若者の現状。

この数字の中の、一人一人の顔を想像できる大人の力が問われている。

貴法人が『しながわチャイルドライン』に名称を変え活動を始めた2003年、僕達も神奈川県横須賀市で『NPO法人アンガージュマン・よこすか』を立ち上げた。

不登校や社会的ひきこもりのこども若者の相談・居場所・学習支援・就労支援（はるかぜ書店経営）活動である。活動開始が同時期であったことは奇遇だが、こども若者の課題が社会化し、奉仕ボランティア活動では対応できずNPO等社会貢献活動へ大きく舵を切った時代であったと改めて実感している。

あれから11年、子どもの貧困と低学力の相関関係が明確になり、こども若者の生き辛さは益々深刻化している。だからこそ我慢強さや自立を求めるのではなく、不安や心配を共有できる社会環境、「悩み」「困り」「不安に」なったら声を上げることが出来る社会を実現しなくてはならない。

それゆえ、チャイルドラインの電話活動では、こども若者が一人で悩まないためのファーストレシーブとして重要さが増していると実感する。そして、ここに寄せられたこども若者の声を共有化し社会化するためには、地域と教育等の連携が大切であるという理解を深めたい。

今まさに、2010年法制化された“こども若者育成支援推進法（内閣府）（注）”を具現化する法に、“たましい”を刻む時と考えます。

社会貢献活動NPO等と公的機関が、こども若者をつつみこむ社会環境づくりに歩みを進める時として。
さあ！共に、またここから。

（注）こども若者の社会環境の悪化と深刻な状況に対して総合的な取り組みを促す法



◎しながわチャイルドライン活動に、あたたかいご支援、ご協力ありがとうございます。

賛助会員及び、企業、団体の皆様には日頃のご支援に心より御礼申し上げます。

（尚、ご協力いただきました皆様のお名前、貴社名は事業報告書に掲載させていただきました）

これからもよろしくお願いいたします。～しながわチャイルドライン会員一同より～

～隣る人上映に寄せて～始まりはひよんなことから！

子どもが保育園の時から仲間が「友達が企画した映画なのお～～」とチケットを持ってきてくれたことがドキュメンタリー映画「隣る人」との出会いだった。

しながわチャイルドラインの何人かが観に行き、「みんなにも観てほしいよねえ～」ということになった。

昨年、しながわチャイルドラインは、品川で子どもを大事に考える方々と一緒に、夜回り先生こと水谷修氏の講演会をした。至らなく申し訳なかったが、応募者を断らなければならないほどに、品川には子どもを思う方々がいて驚いた。

そしてそんな縁から今回、品川社会福祉協議会からも、助成の提案をいただき、助成をいただくことができた。ほんとうにありがたい。

私たちは、更に、そんな繋がりを広め、深められるように、「隣る人」上映実行委員会を立ち上げ上映を決めた。

企画し実行をすると、いろんな方が知恵や手を出してくれる、そんな力が住みよい品川を作り、子どもの持っている無限の力を引き出してくれることを願っている。

是非、「ドキュメンタリー映画『隣る人』」を観ていただき、品川のあちらこちらで、感想などを話し合ってもらいたいものだ。

「『隣る人』上映とトーク」上映実行委員会事務局長 小林けさみ

○第一回実行委員会の後、ポレポレ東中野にて「隣る人」を見に行ってきました。

「光の子どもの家」での生活や子供たちが直面している問題、職員の方々の思いなどを知ることができました。家庭から、日々の暮らしを大切にすることが消えつつあるにもかかわらず、この施設には、しっかりその場があるように感じました。

その後、私の母を誘いもう一度見ました。児童施設に関する映画だと聞いて、はじめは見ることを躊躇していた母ですが、映画を見た後は、「光の子どもの家」にとっても興味を持ち、「もっと多くの人々に、この映画を見てほしい。このような施設があることを知ることが、家庭内で問題を抱え、苦しんでいる人々にとっては助けとなり、一方で児童問題に全く関心のない人々にとっては、現場を知ることができ、考えるきっかけとなり、苦しんでいる人々の助け役が増えるのではないか」と言っていました。

授業の関係で実行委員会にあまり参加できずに申し訳ありませんが、「隣る人」の上映に向けて、少しでも何かお手伝いさせていたきたいです。

「『隣る人』上映とトーク」上映実行委員 清泉女子大学 3年 佐久間



★2014年7月22日(火)

14:00/19:00(開場各回 30 分前)

品川区総合区民会館きゅりあん小ホール(JR・東急大井町駅そば)

・参加費 500 円

・保育＝昼の回のみあり(事前予約)1500 円

・手話通訳＝夜の回のみあり

★各回上映後には児童養護施設「光の子どもの家」理事長、菅原哲男氏
&この映画の企画者、稲塚由美子さんのトークを予定しています。

* 詳細、お申込みについては下記までお問合せください

★主催:「隣る人」上映実行委員会・NPO法人しながわチャイルドライン

後援:品川社会福祉協議会・品川区・品川区教育委員会

助成:東京都協同募金会

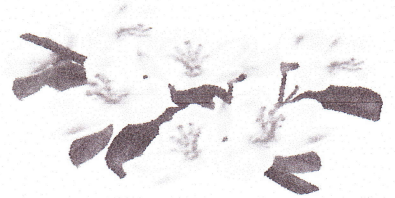
★問合せ:NPO法人しながわチャイルドライン事務局

03(5462)2868

kikumimi-p@outlook.jp

◎みこちゃんへ感謝をこめて

～おばちゃんち初代代表 渡辺美恵子氏追悼～



しながわチャイルドライン事務局長 徳江 安子

私が、初めて渡辺美恵子さん(みこちゃん)にお会したのは、しながわチャイルドラインを立ち上げようか迷っているとき、支援センターのお手伝い要員で、港区の女子会館へ行った時のことです。数名の方たちが、椅子に腰かけている中で一人、キュートな笑顔で出迎えてくれたのが、みこちゃんでした。

支援センターで行うキャンペーン前のお手伝いで出向き、不安な顔をしていた私に「いいのよ、できることをすればね。」と、声をかけてくれました。

なんて、自然体で、ふんわりとした柔らかな方なのだろう、というのが第一印象でした。

その後も、「おばちゃんち」を立ち上げる際、声をかけて頂き、名前だけの理事でしたが、数年間、名前を連ねさせていただきました。立ち上げ前の話し合いで、どんなおばちゃんちが良いだろうかと、それぞれの思っている「おばちゃんち」像について、夢を話し合ったことが昨日のここのようです。

「おばちゃんち」活動は、みこちゃんの人柄と、児童センター館長をされていた手腕が生かされ、品川区で確固たるNPO 団体へと成長し、区との協同を確立し、多くの小さい子を持つ親御さんたちにとってなくてはならないものになりました。

みこちゃんは、子育てメッセや子育て子育てネットワーク会議を立ち上げたり、活動を円滑にするためのアドバイザーとして関わったり、沢山の後輩を出し続けてきています。その力のあるお母さんたちが、自分たちのパワーで何かを無しとげる満足感を十分感じられる活動を通し、子育て中でもこんなにもすごいことが出来るという充実感が子育てにも活かされ、明るいお母さんたちが毎年増えていくのを感じています。

子育てで悩んでいるお母さんたちの手助けがしたいと「ノーバディーズ パーフェクト・完璧な親なんていない」というカナダのプログラムを学び、あちこちに奔走して、もっと子育てを楽しんでほしいというメッセージを送り続けてきていました。子育てに悩む親を勇気づけ、やる気を起こすきっかけを創ったり、精力的に多くのことを実践し、地域に新しい風を吹き込みました。

しながわチャイルドラインでは、みこちゃんは会員にはならず、講師として、毎年のお受け手養成研修に来ていただき、チャイルドラインが一般のボランティアとは違い、守秘義務や、お互いを認め合い信頼しあって、人任せではない自主的な活動であること等、厳しい話も明るい口調で話してくださいました。

忙しいみこちゃんが、時間を作って、しながわチャイルドラインの講師になってくださいました。が、1度だけ、時間になっても来ない、どうしよう…と電話をかけて確認したところ「あ！今日だっけ。わかった、すぐに行くね！！」と言って、風のようにジャージ姿で登場したことがありました。素敵でした。こんな、気取らない、素敵な人になりたいなと思った一瞬でした。

飲み会も、楽しいいつも大きな笑い声で、周りを気遣いながら、人一倍楽しんでいる笑顔が忘れられないです。ただ一つ心残りがあるとすれば、「朝一番の新幹線に乗って、京都行ってみたいね」と言ってくれたあの言葉を、実行できなかったことでしょう。

「しながわチャイルドライン」頑張っているね！といつも励ましてくれたみこちゃん。これからはかたつむりのようなゆっくりした歩みですが、空の上から見守っててくださいね。一人一人の心の中に、みこちゃんの笑顔が浮かびます。

辛いことがあったとき、楽しいことがあったとき、あの笑顔を思い出して、これからも、ちよつとずつ前に向かって進んでいきます。応援しててくださいね。

沢山の宝物を頂き、また、沢山の財産(地域に広げた子ども支援の輪と和)を頂き、本当にありがとうございました。また、お会いできる日を楽しみにしています。



さアー！スキルアップしよう。～4月の継続研修会より～ (K・K)

『子どもの気持ちを聴くスキル』～チャイルドラインで学んだこと～ 山口祐二著(チャイルドライン福岡事務局長)
上記の本をもとに「4～5名のグループに分かれ、各班、目次からひかれる項目を選び、それについて話し合いました。本がととてもよくて、意見が途切れることもなく、深い話し合いができました。その後、全体のシェアもしました。少ない人数でじっくり話せてよかったです。感想を紹介します。

○しながわチャイルドライン継続研修の感想

12期 N・S

会話の奥にある本音の部分に気づいてあげられることが大切だと思いました。子供の気持ちを引き出すきっかけとなる様々な一言はとても参考になりました。何度もいただいたテキスト本『子どもの気持ちを聴くスキル』～チャイルドラインで学んだこと～を、何度も読み返し、少しずつでも自分のものにしてきたいです。

○「沈黙を受けとめる」

12期 Y・Y

私たちが最も時間を費やしたのは、「沈黙を受けとめる」の項目でした。まだ、経験の浅い12期生に、経験談を踏まえながら、対応の事例等を先輩方が伝えて下さいました。この項目の最後に『往々にして、一旦大人は話し始めると聴くことを忘れてしまいがちになります。沈黙はそのスイッチが入るきっかけになりやすいので要注意』と書いてあり、全員が大きく頷きました。『あくまで話をする主体は子どもで、こちらは、しっかり聴くという姿勢を忘れない』ことを意識していく良いきっかけとなりました。

今回の継続研修はとても有意義な2時間でした。

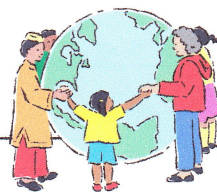
○「基本のき」のおさらいに参加して

12期 A・H

3月から受け手として活動し始めた私たち12期生にとって、今回の研修は、本当に有意義で心強いものでした。山口さんの本の素晴らしさはもとより、班での読み合せ、話し合いを通して、いろいろなご意見を聴くことができ、大変勉強になりました。

特に私たちの班が最初に読んだ項目「“わかるよ”“大変だったね”は要注意」、に関しては、本当にそうだなと心に響きました。まだ始めたばかりで手さぐり状態の私ですが、今回の研修で学んだ数々の大事な点を胸に刻み、少しでも子どもたちに寄り添っていけるように努力したいと思います。

有意義な研修会を開いていただきありがとうございました。



☆チャイルドラインは18歳までの子どものかける電話です。☆

チャイルドラインの発祥は1970年代の北ヨーロッパです。たとえばイギリスではその電話番号を知らない子どもはいません。お説教めき、押し付けめき、子どもたちの声にただただ耳を傾けます。日本では1998年から始まりました。子どもは、本気で自分の話を聴いてもらえた、受けとめてもらえたと感じることが出来れば、自分自身で、その課題と向き合い、乗り越えていく力を持っています。そう信じ、子どもの「ことば」の奥にある「こころ」を受けとめることに全力を傾ける、「電話でつながるこころの居場」それが、チャイルドラインです。

**☆賛助会員募集中(1口 2000円)・年会費・賛助会費・ご寄附などは
郵便振替00160-5-664278 NPO 法人しながわチャイルドライン へお寄せください**

編集後記

5月末の総会では、いろいろ出し合い、話し合い、考えあつて、活動をさらに、充実していけることと思います。

昨年の「水谷修氏講演会」ではたくさんのつながりが生まれました。今年は『隣の人』上映会を企画し、支え合う仲間をふやして愉快にいきたいと、上映実行委員会を開いています。そして、メンバーの想いを“子どもたちにつないでいきたい！”



☆Pass on the gift of kindness to children! ☆ (山口祐二氏著書の言葉より) (Y・K)